DENSHO
伝書

ミシガン大学
日本研究センター
2009年秋

所長挨拶

今季号のこのコラムは、ミシガン大学での教鞭および研究のために傑出した学者ならびに公人を招聘する日本研究センター（以下「当センター」、「CJS」等）のプログラムであるトヨタ招聘客員教授プログラムに焦点を当てることにします。1988年にトヨタ自動車株式会社から寄贈された寄付金によって開始された当初の客員教授プログラムは、日本の教授と欧米の教授を毎年交互に招待するように計画されました。この制約は年を経て拡張され、最近ではイスラエルやオーストラリアからの教授も歓迎するに至りました。客員教授の専門分野は歴史、人類学、文学、政治学、民族音楽学、社会学、心理学、ビジネス、映画など広範囲にわたり、肩書もジャーナリスト、文化評論家、ならびに他の学界以外の職業が含まれています。このトヨタのプログラムは、今日までに合計34名の客員教授をミシガンに招いています。

客員教授はしばしば、彼らにしか教えられない履修コースを提供します。初代トヨタ招聘客員教授（以下「TVP」）である近藤大博（1988～1989年度TVP）は、その直前には影響力の強い月刊政治文化評論誌である『中央公論』の編集長でした。彼は、近代日本史のレンズとしての日本の定期刊行誌に関するコースを教えたとき、彼自身の深い経験に基づくメディアを基盤とした日本に関する見解を提供してくれました。また、彼のミシガン滞在は、彼の将来の方向性に影響を与えた可能性もあります。なぜなら彼は、ジャーナリスト兼文化評論家としての仕事に加え、日本大学で教鞭をとるようになり、同大大学院の総合社会情報研究学科の教授としてミシガンでのコースと同様のコースを日本人学生を対象に提供するようになったからです。ドナルド・リッチー（1993～1994年度TVP）は、日本映画の国外での本格的な研究の先鞭をつけたと言える当の本人から日本映画を学ぶ機会をミシガンの学生たちに与えてくれました。リッチーは大学に所属しない評論家であり定期的に教鞭を執っていたわけではありませんでしたから、これは稀有な機会となりました。

トヨタ招聘客員教授によって実施される研究は、その成果として、日本研究に関する最高の良書を何冊も含む多種多様にして印象深い学術体系を生み出しています。ジェニファー・ロバートソン（1991年度TVP）は、招聘期間中に『Takarazuka: Sexual Politics and Popular Culture in Modern Japan（踊る帝国主義：宝塚をめぐるセクシャルポリティクスと大衆文化）』のための膨大な実証研究を完了しました。同著は、卓越した音楽劇研究としてクルト・ヴァイル賞を受賞しました。ロバートソンは、後にミシガン大学教員陣に加わり、現在は当大学の人類学教授を務めています。ウィスコンシン大学ウィリアム・F・ヴィラス人類学教授の大貫恵美子（Emiko Ohnuki-Tierney）（1995～1996年度TVP）は、ミシガンでの招聘期間中に、最終的に『Kamikaze, Cherry Blossoms, and Nationalisms: The Militarization of Aesthetics in Japanese History（カミカゼ、サクラ、ナショナリズム：日本史にみる美意識の軍国主義化）』として発表された研究に着手しました。同著はキリヤマ賞の最終選考に残りました。ジョージタウン大学の日本史・日本文学准教授であるジョーダン・サンド（2001～2002年度TVP）は、彼の招聘期間を『House and Home in Modern Japan: Architecture, Domestic

第7ページに続く

総編集長より

ミシガン大学では邦楽研究グループが1964年から1994年まで年次コンサートで演奏を披露していました。コンサートには江戸時代の祭囃子や時には琴曲も含まれましたが、その主要ジャンルは、元来は歌舞伎や舞踊の伴奏音楽として書かれた歌詞付きの曲である長唄でした。学生は、日本語での歌唱、または歌舞伎の中で用いられた能劇の三味線か三種類の太鼓の一つの演奏を習いました。能と尺八も教えられました。

そうした30年の間、コンサートで用いられた長唄の歌詞は、大抵のところ学生が翻訳していました。そして今、その翻訳が音楽学の名誉教授であり邦楽研究グループの元ディレクターであるウィリアム・P・マルムによって『An Anthology of Nagauta（長唄歌詞選集）』という一冊の本にまとめられました。同著は、三味線と長唄を概要説明した最初の2章に続いて、1753年から1967年までの31作品の翻訳を記載しています。注釈付きの翻訳はローマ字の歌詞と対比表示され、日本語の完全原文が用語集と文献目録を伴い巻末に掲載されています。さらに、代表作品7曲を収録したコンパクトディスク2枚も監修されています。

この素晴らしい書物は、長唄の包括的研究のみならず、ミシガン大学における日本研究の歴史の一端も与えてくれます。入手方法および価格に関する詳細情報につきましては、当センターのウェブサイト、www.umich.edu/~iinet/cjs/publications/ をご覧ください。

また、出版会としては、絶版となっていた書籍2作品を検索・ダウンロード可能なウェブ形式で入手可能としたこと（さらにまもなくオンデマンド印刷でも入手できること）を、ここに喜んで発表します。ジョ

第15ページに続く

目次

図書館司書より 2

トヨタ招聘客員教授より 2~3
トヨタ招聘客員教授最新情報 3
ロンドンでの一年 4~5

ミシガン大学美術館の日本版画コレクション 5
センター催し物 6

これまでの催し物 7
教員・アソシエート短信 8
教員・卒業生・フレンドによる新著 8～9
教員・学生助成金 10～11
学生・卒業生短信 12
お知らせ 13
カレンダー 14

図書館司書より

アジア図書館は、楊繼東博士の新館長就任から7月1日で1周年を迎えました。楊博士は、過去1年間にわたり、全体的予算危機のさなかにおいて、新規のアイディアや方法を取り入れ、新たな息吹を図書館にもたらしてくれました。この財政問題にもかかわらず、アジア図書館は教員、スタッフ、その他の利用者に援助を提供すべく努力し、学術的定期刊行物の購読を含めた当図書館の蔵書の維持のために最善を尽くしています。ミシガン大学の日本コレクションが全米最高水準を維持することを徹底するために当図書館の提供内容に関するフィードバックをいただけますよう、アジア図書館員を代表して皆様に協力をお願いします。

いずれにせよ、アジア図書館の書籍、研究資料、電子資料（多数のCD-ROM、DVD、オンライン・データベースを含みます）は、日増しに増加しています。当図書館のデジタル資料庫は全米でも最高の資料庫の一つです。質問につきましては、鈴木真理（日本語電子資料担当図書館司書）、和子・アンダーソン（日本関連の調達情報アシスタント）、仁木賢司（日本部部長）まで、気軽に連絡してください。さらなる詳細情報につきましては、http://www.lib.umich.edu/asia/をご覧ください。

アジア図書館
日本部部長
仁木賢司

トヨタ招聘客員教授からの挨拶

2009年1月のトヨタ招聘客員教授歓迎レセプションで（左から）ケン・イトウ（日本研究センター所長、ALC教授）、平野克弥（2009年冬期トヨタ招聘客員教授）、ジョナサン・ズウィッカー（ALC准教授）

私のトヨタ招聘客員教授としてのミシガン大学滞在は、1月初旬に始まり4月末に終わるという比較的短いものでしたが、日本研究センターの教職員、アジア図書館の図書館員、新旧の友人たちの温かいもてなしによって豊かなものとなりました。彼らとはキャンパスの内外で素晴らしい会話を数多く交わしました。さらに、勤務先のコーネル大学での任務から解放されて自分の著作プロジェクトの研究に専念できたことは、大いなる特権でした。ミシガンの図書館のコレクションは、とりわけ徳川日本の文化的、社会的、知的な歴史に関する私の研究分野に関して真に印象深いものであり、仁木賢司氏の計り知れないほど貴重な援助によって自分の研究を大幅に進めることができました。また、トヨタ招聘客員教授の主な要件であるミニ・セミナーを教えたことも、幸いにも意欲旺盛で聡明な学生たちがクラスに集まり、私に大きな喜びを与えてくれました。コースは、「慰安婦」問題をとりまく物議をかもし出しますます複雑になっている課題、歴史、および記憶を取り扱ったという事実にもかかわらず、毎回毎クラス、非常に開放的で建設的な話し合いが交わされ、成功であったと私は考えています。常にそうなのですが、私は自分の学生が誠意と素直さをもって新しい知識と見解を探索することに対して示した意欲から大いに学びました。その点、学生たちに感謝したいと思います。

ミシガンに向けて出発する前、友人の一部がアン・アーバーでの生活はニューヨーク州イサカ（コーネル大学の所在地）での生活と似たり寄ったりだ、両方とも大学の町だから、と私に話していました。ところが、アン・アーバーは文化的、民族的に多様な構造にあることからよりダイナミックな「コスモポリタン」都市であることを、私は知ったのです。私は多種多様の社会的または文化的なイベント、レストラン、カフェを発見してはわくわくし、友人や同僚との美味しい食べ物や飲み物を楽しみながらの会話を満喫しました。しかし、アン・アーバーの天候はイサカの雪に埋もれた寒い冬を思い起こさせるものであったことも、述べておくべきでしょう。私の滞在の最初の2週間に新聞やケーブルTVが伝えていた最高気温は華氏6～10度であり、しかもほぼ毎日のように雪が降りました。私は車を持ってきていなかったため、アパートからキャンパスまで（約20～25分）歩くより他にすべはありませんでした。それまでも自分は極寒の気候に適応できるに十分長く冬の厳しい場所に住んだことがあったと思っていました。が、このような天候の中を徒歩で行かなければならないとなると、話はまったく異なります。難儀ながらも思い出深い経験になりました。

最後に、私の滞在を非常に幸せなかけがえのない経験にしてくれた友人ならびに同僚にお礼を述べてこのご挨拶を締めくくりたいと思います。以下の描写が書籍の「謝辞」のように読めても、どうぞ我慢してください。私がミシガンで素晴らしいときを過ごせた理由そのものである彼たちのもてなしと友情に対して感謝の念を表現するうえでこれに勝る方法を他に思いつけないのですから。ジョナサン・ズウィッカー教授、真の意味で素晴らしいホストでいてくれたことに特に感謝します。彼は、多忙なスケジュールや家族に対する責任にもかかわらず、食料雑貨の買い物、昼食、夕食に連れ出してくれたばかりか、我々の研究分野や日本研究分野の現状などの数多くの興味深い主題に関する会話を通じて刺激ある知的環境を提供してくれました。

私は、来夏、19世紀日本に関して我々の研究や考察を共有できるアン・アーバーでのワークショップを今から心待ちにしています。また、私の家族と私にとって彼の素晴らしい家族に知り合えたことも、大きな喜びとなりました。彼の奥さんのキョンミさんは親切なことに私を家族共々自宅に招いてくれ、私の娘のユウキは彼らの愛らしい子どもたちのマーラとジェイコブと最高に楽しいひと時をすごしました。レスリー・ピンカス教授は、親切にも夕食やドリンクをとりながら歴史、映画、研究課題などについて語り合う時間を分かち合ってくれました。彼女に対しては私の仕事について常に励ましの言葉をかけてくれたことに感謝しています。また、私の滞在中にケン・イトウ教授が日本研究センター所長であったことは幸いなことでした。彼の温かい歓迎には感激しました。福岡真紀教授はシカゴでの大学院以来の良き友ですが、彼女が休暇でいなかったのは寂しいことでした。木下千花教授もシカゴ以来の友人であり、映画研究の客員教授としてミシガン在住中であったため、彼女の存在が私の滞在をより楽しくしてくれました。日本研究センターのスタッフ、すなわちサンディ・モラスキーさん、深澤ゆりさん、髙田あづみさん、ジェーン・オザニッチさんは、常に助けとなってくれ、私の滞在を方向性の定まった快適なものにしてくれました。感謝しています。大学院図書館の仁木賢司さんと和子・アンダーソンさんは、私の研究を実施可能かつ生産的なものにしてくれました。両人は、私が必要なときにはいつでも進んで手を差し伸べてくれた本当に素晴らしい人たちです。ミシガン大学美術館のアジア美術担当研究学芸員の及部奈津さんは、親切にも何点かの江戸時代の版画の閲覧を許可してくれ、彼女の専門知識を分け与えてくれました。私の研究助手の趙秀美さんは、資料を探し出し複写コピーをとるうえで見事な大活躍をしてくれました。来夏にミシガンを再度訪れた際に皆さんとまた語り合えることを心待ちにしています。

2009年冬期トヨタ招聘客員教授
コーネル大学歴史学助教授
平野克弥

トヨタ招聘客員教授最新情報

川人貞史（2006〜2007年度TVP）は、東北大学の政治学教授でしたが、今春、東京大学に赴任し、日本政治学の教鞭を執っています。今年6月に日本学士院賞を受賞しました。

ドナルド・マッカラム（2000年冬期TVP ）は最近、新著『The Four Great Temples: Buddhist Archaeology, Architecture, and Icons of Seventh-Century Japan（四大寺：7世紀日本の仏教考古学、建築、偶像）』（University of Hawai'i Press）を出版しました。この仕事の相当部分をミシガン在職期間中に成し遂げたことから、マッカラム教授はCJSとマーティー・パワーズ教授にトヨタ招聘客員教授として招待されたことを感謝しています。（マッカラム教授の書籍に関する詳細につきましては第8ページをご覧ください。）

マーク・マクレランド（2007〜2008年度TVP）は、オーストラリア帰国後まもなく、「Japanese Transnational Fandoms and Female Consumers（国境を越えた日本のファン文化と女性消費者）」を主題とし、人類学教授クリスティン・ヤノのハローキティのグローバル化に関するキーノートスピーチを呼び物に、ワークショップを開催しました。このワークショップは、北米、オーストラリア、日本、韓国、香港、中国の学者が20のプレゼンテーションを発表し、女性のオタクや漫画・アニメの『ボーイズラブ』ファン文化の女性および少女の間における急速な世界的浸透などの課題を検討しました。ワークショップからの論文は、電子ジャーナル『Intersections: Gender and Sexuality in Asia and the Pacific（インターセクション：アジアおよび太平洋地域におけるジェンダーとセクシュアリティ）』（http://intersections.anu.edu.au/issue20_contents.htm）の第20号からオンラインで入手できます。

牟田和恵（2004年秋期TVP）は、上野千鶴子などの数名のフェミニストの学者および活動家と共に、今年6月に「ウィメンズアクションネットワーク（WAN）」（http://wan.or.jp/）と称する女性のウェブサイトを立ち上げました。このサイトは、1）日本全国から女性の草の根活動とフェミニスト団体を提示し、2）ジェンダー・センシティブな観点から書籍情報を提供するフェミニスト専門ウェブ書店を掲載し、3）各地の女性センターやフェミニスト法律事務所など女性に関する有用な情報を配布します。牟田教授は、皆さんにサイトを訪れてウェブ会員に加入するよう呼びかけています。サイトは現在のところ日本語のみですが、英語版も準備中です。

大貫恵美子（Emiko Ohnuki-Tierney）（1995〜1996年度TVP）は、アメリカ議会図書館の現代文化特別招聘学者（任期：2009年2月1日〜7月31日）に任命され、講演を2回行いました。2009年の秋期は仏国政府により新設されたパリ高等研究所（L'Institut d'Etudes Avancées-Paris）ですごします。現在は、比較の観点から日本の資料を利用して文化、アイデンティティー、および象徴の理論に関する書籍に取り組んでいます。

ラインハルト・ツェルナー（2003〜2004年度TVP）は、2008年にエアフルト大学を去り、ボン大学の日本研究学部長に就任しました。就任直後に日本研究学部が東洋学研究所（The Institute for Oriental and Asian Studies）に統合された結果、ツェルナー教授は、コリア研究学を同学部に編入するために同学部の目標と方針課題の再構築で多忙な日々をすごしています。今年5月には、彼の東アジア史に関するドイツ語での教科書が妻の久美子氏により翻訳され、東京の明石書店から拡張日本語版として出版されました。独語版は2007年に再版されています。さらに、2006年に初版が刊行された著作『History of Japan from 1800 to the Present（1800年から現在までの日本史）』も今年初めに第2版刊行となりました。これは一部の人々から近代日本史の新しい標準的教科書とみなされています。ツェルナー教授は、同著についてはアジア図書館の書架、CJSの卓越した同僚との素晴らしい会話、そして彼が仕事を共にする機会を与えられた信じられないほど聡明な学生たちから計り知れない貴重なインスピレーションを得たと述べ、同著の功績をその準備にとって必要不可欠となったCJS滞在期間に帰しています。

ロンドンでの一年

たった今、書籍でいっぱいの箱を7箱、詰め終えました。箱は、明日、引越し業者に引き取られ、約6週間後、ちょうど秋期が開始する頃にアン・アーバーに到着する予定です。この文章をタイプしながら、私は完結と刷新の二つの感覚を同時に感じています。

私は、セインズベリー日本藝術研究所のロバート・アンド・リサ・セインズベリー・フェローとして2008年9月から2009年8月まで英国に滞在しました。この期間の私の目標は、「Between Seeing and Knowing: The Concept of Real in Japan, 1830–1872（見ることと知ることの狭間で：1830～1872年の「リアル」という概念）」と題するプロジェクトの草稿を完成させることでした。

私のプロジェクトは、徳川幕府末期から明治初期にかけて尾張（現在の名古屋市）で医療に従事した学者の結社、『嘗百社』の活動を調べることです。中国伝来の東洋医学の訓練を受けたこの結社は、その当時の医療実務において必須の構成要素であった本草学の彼ら自身の理解と応用を追求するために、輸入された欧州の書物を通じて導入された方法とアイディアを探索し始めました。結社は、彼ら自身の知識を確証するために異なる原則および認識論的枠組みを遂行する過程において、研究を確実に進めるための強力で啓示的なデバイスとして視覚および絵画的描写の役割をますます重視するようになりました。嘗百社は、公開合同展示会を開催し、彼ら自身の挿絵を作成、模写し、顕微鏡や写真を実験して、研究を進めていきました。これは私のプロジェクトを貫く論旨でもあるのですが、非常に妙味あることは、「写真」という用語が彼らの仕事に繰り返し表れているという事実です。広く知られているとおり、「写真」という用語は、1880年代頃には「フォトグラフィー」を意味するようになりましたが、写真とフォトグラフィーが対になる前の「写真」の社会的存在は、複雑で魅惑的な歴史を呈しています。この用語の歴史的用途は通常、芸術的な理論と実践において探求されてきていますが、この用語と私たちが称するところの「科学的」試みの研究との関係は、未だ完全には探索されていません。嘗百社の人々は、いかにしてこの用語を本草学の研究に有意義かつ適切なものであること解したのでしょうか？

ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）の中にある「長州セブン」の記念碑

私のプロジェクトの主題は、科学、芸術、技術の歴史を探求するものです。さて、私がセインズベリー・フェローに応募した理由の一つは、このフェローシップがロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）の事務所と提携関係にあることでしたが、これは、きわめて重要でした。SOASが大英博物館から文字通り徒歩3分の距離にあること、SOAS図書館の豊富なコレクションにアクセスできることは、プロジェクトに関係する日本語資料の閲覧に便利だったからです。さらに、ウェルカム・コレクションの一部であるウェルカム図書館もSOASから2、3ブロック内にあり、その素晴らしい医学書のコレクションも嘗百社の哲学的思考を明確に述べる章を執筆するうえで役に立ちました。

私が前もって知らなかったため、英国滞在中、嬉しい驚きとなったことは、キュー王立植物園にある一群のオブジェでした。25の木製パネルから構成されるオブジェは1875年作のもので、多種多様の樹木が用いられていますが、その大半は日本原産のもので、木製パネルの表面に図が彫刻されています。一見したところ様々な美術館で利用されている現代物の現場資料のプロトタイプに見えるこれらのパネルは、縁は樹皮、縁の角は枝の水平断面、パネル面自体は幹の垂直断面という具合に、樹木の様々な部分から作成されています。彫刻された図は花や葉を表しています。これらパネルは、東京の小石川植物園で遅くとも1875年には仕事をしていた加藤竹齋の作とされています。嘗百社のリーダーであった伊藤圭介が1870年から小石川植物園で働いていたことから、これらパネルは、徳川時代から明治時代にかけての嘗百社の絵画慣行に歴史的に関連付けられます。伊藤は加藤を含めた他の植物学者と協働し、図説集を出版しました。

ダイナミックでエネルギッシュな研究所であるセインズベリー研究所は、ロンドン市内外で広範囲にわたる日本関係の催事を組織し、主催しています。なかでも特に思い出深いのは、東芝日本美術レクチャー・シリーズで、これは、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館とロイヤル・カレッジ・オブ・アートで教鞭を採るクリスティン・グース教授が行った3回にわたるレクチャー・シリーズでした。このシリーズは「Hokusai's Great Wave: The Making of a Global Icon（北斎の偉大なる波：グローバルイコンの製作過程）」と題され、グース教授は、木版画という表現手段に固有の「原画」の複数性こそが日本美術の中でも最も広く認識されている北斎のこの作品への歴史的な到達のカギであった様子を、気品と説得力をもって実証してくれました。グース教授は4月にCJSのヌーン・レクチャーで同様の課題でのレクチャーを行う予定となっていますので、『神奈川沖浪裏』に鼓舞されたオブジェに思いをめぐらしたことがある方は誰でも、彼女のレクチャーにぜひとも出席されるようお勧めします。

セインズベリー研究所は、6月にはエドアルド・キオッソーネ東洋美術館（Museo

d'Arte Orientale Edoardo Chiossone）を訪れるイタリアはジェノヴァへの小旅行を開催しました。エドアルド・キオッソーネ（1833〜1898年）が収集した約2万点のコレクションを所蔵しています。彫刻師として訓練を積んだキオッソーネは、1875年から死ぬまで東京の造幣局に勤務し陣頭指揮をとりました。（彼は青山墓地に埋葬されました。）彼は、新しい明治の構造基盤を象徴した小切手や紙幣や切手をデザインしただけでなく、日本国内をくまなく旅行しました。素晴らしく豊かで多様な彼のコレクションは、この美術館に完全所蔵され、明治初期の物質文化に啓発的な洞察を提供しています。その好例が、シーボルト兄弟からキオッソーネに献呈された魅力満載の写真アルバムです。このアルバムは、丁寧に見出しが入れられた何十枚かの写真で構成されている土産物写真であり、横浜写真としても知られていて、民間の写真スタジオでも販売されていました。イメージの連続は、明治初期にキオッソーネとシーボルト兄弟が分かち合った魅惑的な主題としての視覚化された「日本」感をほうふつします。

このように、前学年度は私にとって実に得るところが多いものとなりました。自分の原稿の修正に加えて、オックスフォードの日産日本問題研究所、SOASの日本研究センター、ノーウィッチのセインズベリー研究所で行った私の講義は、英国および欧州を拠点とする学者とのいっそう掘り下げた会話の貴重なプラットフォームとなりました。また、たとえば700を超える貝母の球根を栽培していて、嘗百社のメンバーの挿絵は彼がこれまで見た中で最高だ、と断言する貝母・オタクなど、決して想像だにつかないような人々数名にも会う機会がありました。しかし、時には私の仕事のなかで別の報いある側面、すなわち教えることと学生とやりとりすることがないため、寂しい思いをしたときがあったことも、また真実です。明日ロンドンを去る箱と共に、私もアン・アーバーに戻って自分の研究を継続し、再び教職に従事することに心踊る喜びを感じています。

ミシガン大学アジア言語文化学部助教授
福岡真紀

ミシガン大学美術館の日本版画コレクション

ミシガン大学美術館（UMMA）に新しくオープンした日本美術展示室の特徴の一つは、当美術館の膨大な日本美術コレクションから選んだ浮世絵と現代版画の常設展示です。版画展示用にデザインされた引出し付きケースに収納されているものも含め、一度に最高18点が展示されています。

今秋の展示には、詩歌的な日本の風景描写で最もよく知られている江戸後期の浮世絵師、安藤広重（1797〜1858年）による作品が選ばれました。展示室には、彼の傑作『東海道五十三次』（1833〜1834年）から『蒲原・夜之雪』などの有名な作品、そして『近江八景』シリーズ（1834年）からの数作品が含まれています。『近江八景』は、『東海道五十三次』ほどは知られていないシリーズですが、広重の優れた構成感覚と実験精神を示しています。

UMMAの版画コレクションは、懐月堂度繁（活動年間：1710〜1716年）や鈴木春信（1725〜1770年）などの初期の大家から、喜多川歌麿（1754〜1806年）や鳥居清長（1752〜1815年）など華やかな作品で有名な作家まで、広範囲を網羅しています。当美術館はさらに、江戸後期から明治初期に制作された歌舞伎役者を題材とした200点を超える役者絵を所有していますが、この大半は2003年にジェイムズ・ヘイズ氏により寄贈されたものです。当美術館の現代版画コレクションも同様に素晴らしく、新版画の木版画家である斎藤清（1907〜1997年）による作品が80点以上含まれています。これからも日本美術展示室の作品は定期的に入れ替えられ、素晴らしい版画を披露し続けていきます。

ミシガン大学美術館
アジア美術担当研究学芸員
及部 奈津

上：
斎藤清（1828〜1836年）
『障子（桂 京都）』
昭和時代、20世紀中期
木版多色摺り・和紙
作者寄贈
1959/2.16

右：
安藤広重（1797〜1858年）
『近江八景：比良の暮雪』
江戸時代、1834年
木版多色摺り・和紙
マーガレット・ワトソン・パーカー寄贈
1948/1.134

セ　ン　タ　ー　催　し　物

小津安二郎の『彼岸花』のーシーン
写真提供：ジャナス・フィルムズ社

2009年秋期映画シリーズ

CJSの秋期映画シリーズは、戦後の日本を代表する映画監督の7作品を上映します。シリーズは9月25日に黒澤明の『酔いどれ天使』で始まり、11月6日に鈴木清順の『東京流れ者』で終わります。シリーズにはさらに黒澤と鈴木の他の映画作品、ならびに小津安二郎の2作品と市川崑の1作品が含まれます。シリーズのスケジュールにつきましては、http://www.ii.umich.edu/cjs/eventsprograms/filmをご覧ください。映画上映はすべてアスクウィズ・オーディトリアム（ローチ・ホール）で午後7時に開始され、無料で一般公開されています。

2009～2010年ヌーン・レクチャー・シリーズ

CJSの2009～2010年ヌーン・レクチャー・シリーズは、9月17日に開始され、学年度中を通じてほぼ毎木曜日にレクチャーが予定されています。今学年度のシリーズは、2009年度のトヨタ招聘客員教授であるジュリア・アデニー・トーマスが教える「Seeing History: Photography as Evidence and Interpretation（歴史を観る：証拠と解釈としての写真）」と題したコースに関連して招待される講師の講演が含まれています。アレン・ホックリー（ダートマス大学美術史学部）、ポール・バークレ（ラフィエット大学歴史学部）、カレン・フレーザー（サンタクララ大学美術史学部）がキャンパスでヌーン・レクチャーを行うとともに、トーマス教授のコースに参加します。この3名の講師に加えて、CJSは、成功を収めた2009年4月17日のパネル・ディスカッション「Financial Bubbles, Banking Bailouts, and Automotive Survival: A US-Japan Comparison（金融バブル、銀行救済、自動車メーカーの存亡：日米比較）」の継続として、冬期にもヌーン・レクチャーを2、3回開催します。これらのレクチャーは、国際交流基金の協賛で行われます。ヌーン・レクチャー・シリーズの全講演者のリストにつきましては、http://www.ii.umich.edu/cjs/eventssprograms/noonを訪れてください。

第6回年次お餅つき

CJSは、年次お餅つきを2010年1月9日午後1時～4時に主催します。このイベントは、音楽の生演奏、ゲーム、折り紙、紙芝居、書道、食べ物、そして伝統的な方法で（臼と杵を用いて）お餅をついてみる機会と、盛りだくさんです。詳細情報を知りたい方、ボランティアに関心のある方は、CJS（umcjs@umich.edu）までご連絡ください。

円内：
2009年のお餅つきでボランティアに見守られながら書初めに取り組む参加者

下：
臼と杵でお餅をつくために餅米を準備するお餅つきボランティア

日本の長き19世紀：学際的ワークショップ&実習

CJSは、2010年の初夏に、日本の長き19世紀の歴史と文化に関する学際的ワークショップを開催します。このワークショップは、ジョナサン・ズウィッカー（アジア言語文化学部准教授）、福岡真紀（アジア言語文化学部助教授）、平野克弥（2009年冬期トヨタ招聘客員教授、コーネル大学歴史学部）によって主催されます。他の教員参加者には、ダニエル・ボツマン（ノースカロライナ大学チャペルヒル校歴史学部）、スーザン・バーンズ（シカゴ大学歴史学・東アジア言語学・文明学部）、テツオ・ナジタ（シカゴ大学歴史学部）が含まれます。

「日本の長き19世紀：学際的ワークショップ&実習」は、6月7日から12日まで実施され、主催者および招待参加者が草稿する一連のワーキングペーパーに基づいて構成されます。ペーパーは予め配布され、午前のセッションは方法についての一般的質問および調査方針の枠組みに焦点を当てた、ペーパーに関する集中的協議にもっぱら費やされます。そして午後のセッションは、ミシガン大学の美術館や図書館からの19世紀日本の研究に関係する多種多様の形態および形式の資料を用いた現場作業に専念する実習です。開催場所には、アジア図書館、クレメンス図書館、地図図書館、特別コレクション、ミシガン大学美術館が含まれます。

このワークショップは、ミシガン大学および他の学術機関からの上級大学生と大学院生を主な対象とします。CJSは、学外からの学生には宿泊施設と食事を提供し、ワークショップに参加する上級大学生のうち5名にはフェローシップとして1人当たり500ドルを支給します。大学院生の参加者には、それぞれの所属校を通して助成金を申請することが期待されます。

詳細情報は、学生用の応募書類を含め、2009年初秋に入手可能となる予定です。お問合せは、ジョナサン・ズウィッカー宛て（jzwicker@umichi.edu）にお願いします。

これまでの催し物

ミシガン大学の学生、スピーチコンテストで今年も再び上位入賞

3月28日、在デトロイト日本国総領事館、デトロイト日本商工会、デトロイト・ウインザー日米協会が協賛する日本語スピーチコンテストに、ミシガン大学日本語プログラムの学生3名が参加しました。エレノア・ユンが「The Power of Pillow（枕の力）」と題したスピーチで第1位を、そしてハンキョン・チョーが第2位を受賞しました。ユンさんは、優勝スピーチの賞品として日本往復航空券と滋賀県（ミシガン州の姉妹県）での1週間のホームステイを授与されました。ミシガン大学からのもう1名のファイナリスト、コリン・ウィルソンもスピーチを披露しました。このスピーチコンテストは年に一度開催され、ミシガン大学は現在、5年連続で第1位の座を守っています。

左から右に：
エレノア・ユン
（ミシガン大学学生）
宇治原奈美
（ミシガン大学日本語講師）

左から右に：
（ミシガン大学学生）
近藤純子（ミシガン大学日本語講師）
ハンキョン・チョー（ミシガン大学学生）
コリン・ウィルソン（ミシガン大学学生）
エレノア・ユン（ミシガン大学学生）
渡会尚子（ミシガン大学日本語講師）
小畑美貴（ミシガン大学大学院生インストラクター）
宇治原奈美（ミシガン大学日本語講師）

所長挨拶

第1ページより続く

Space, and Bourgeois Culture, 1880–1930（近代日本における家と家庭－建築、家内空間、ブルジョア文化：1880～1930年）』の原稿の修正に充てました。この研究は、アメリカ歴史学会のジョン・K・フェアバンク賞、アジア学会のジョン・ホイットニー・ホール賞、建築史家協会のアリス・デイヴィス・ヒッチコック賞を含め、複数の賞を獲得しました。

また、ボン大学教授であるラインハルト・ツェルナー（2003～2004年度TVP）は、多くの人がドイツ語で書かれた近代日本史の標準的教科書であるとみなすその著書の執筆作業を本学のアジア図書館の書物の山から開始しましたが、その報告は今回号のニュースレターの他の箇所に紹介されています。そしてUCLAの美術史教授ドナルド・マッカラム（2000年冬期TVP）はつい最近、彼のミシガンでの調査を基礎に築き上げた研究の成果、『The Four Great Temples: Buddhist Archaeology, Architecture, and Icons of Seventh-Century Japan（四大寺：7世紀日本の仏教考古学、建築、偶像）』を出版したところです。

完全完備リストに多少とも足りない記載を行うことは、トヨタ招聘客員教授プログラムから出現した多数の素晴らしい学問の例を軽視する危険に自分を陥れることになるのは承知ですが、このプログラムが促進した仕事の範囲の広さが上記の少数の選択例によって示唆されるものと私としては願っています。また、トヨタ招聘客員教授プログラムはこうした出版を通じてミシガンをはるかに越えた遠方にも影響を及ぼしていると間違く言えると私は思います。

とはいえ、私の立場から述べますと、私はトヨタ招聘客員教授がアン・アーバーにもたらしてくれたものに対して最も感謝しています。トヨタ招聘客員教授は、彼らの授業、研究、彼らのアイディア、そして彼らの人柄によって、ミシガン大学の学者および学生としての私たちに忘れられない印象を与えてくれ、私たちの人生を無限に豊かにしてくれています。それぞれが自ら進んで各自の日常を離れてやってきて彼らの生活と思考を私たちと共有してくれた客員教授たちは、全員が一人一人、私たちから感謝の辞を受けるに値します。そして、トヨタ自動車株式会社も、計り知れない恩恵を生み出し続ける同社の明確なビジョンを持ったこの寄贈に対して、感謝の辞を受けるに値します。

今学期は、ノートルダム大学のジュリア・アデニー・トーマスが2009～2010年度トヨタ客員招聘教授として来訪します。近代日本史を専門とするトーマスは『Reconfiguring Modernity: Concepts of Nature in Japanese Political Ideology（近代の再構築－日本の政治イデオロギーにおける自然の概念）』の著者であり、同著はジョン・K・フェアバンク賞を受賞しています。ミシガン滞在中に、彼女は、著作『Between Reality and Sex: Japanese Photography in War, Occupation, and After（現実と性の間：戦争、占領、その後の日本の写真）』（仮題）のための仕事を継続します。さらに、歴史的証拠としての写真の使用に関するコースを教えます。私といっしょに彼女をCJSコミュニティに温かく迎えてください。

所長
ケン・イトウ

マイケル・フェターズ（家庭医療学部）は、最近、日本家庭医療学会に2本の論文「家庭医療研修におけるオリエンテーションの重要性～ミシガン大学家庭医療レジデンシーにおけるオリエンテーションの分析より」（宮崎景、ジェームス・クックとの共著）および「なぜ、日本の家庭医学研修に婦人医療研修が含まれるべきなのか?」（藤岡洋介との共著）を発表しました。2009年7月には、英国ハロギットでの第5回HSHS混合法学会において、滋賀医科大学の田中努教授と共同プレゼンテーションを行いました。両教授の発表は、日本で医学生がたどるキャリアの道に関して探求的混合法において定質的に生み出した概念モデルと定量調査のデータの確証に焦点を当てました。また、フェターズ教授が指導するミシガン大学日本家庭健康プログラムには、今年の1月から5月の間に医師2名と医学生4名が訪問しました。

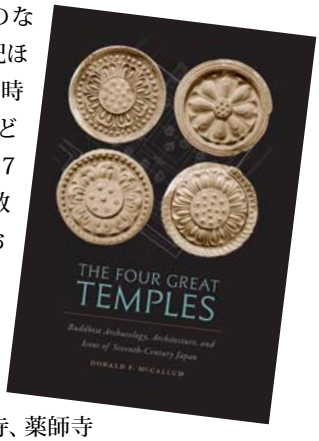
北山忍（心理学部）は、今年は9本の出版と、ドイツはブレーメンでの国際異文化間心理学学会の年次会議、スタンフォード大学での異文化コラボレーション国際ワークショップ、東京での日本認知科学会の第7回年次会議の3つの機会においてキーノートスピーチを行いました。さらに、カリフォルニア大学サンタクルス校心理学部（4月）、南カリフォルニア大学の脳・創造性研究所（The Brain and Creativity Institute）（4月）、カリフォルニア大学サンタバーバラ校心理学部（5月）から招待され、講義を行いました。北山教授は、2008年以来、『Personality and Social Psychology Bulletin』誌の編集者を務めています。なお、2008年にはスタンフォード大学の行動科学高等研究センター（The Center for Advanced Study on Behavioral Sciences）のフェローシップも受けました。

ジェニファー・ロバートソン（人類学部）は、2009年の5、6月にはイスラエルのテルアビブ大学社会学・人類学部の客員教授でしたが、その間、集中セミナーの教鞭をとり、また、イスラエル人の大学院生を対象に米国の大学留学願書用の志望動機書と研究概要・計画の書き方を教える2時間のワークショップを実施しました。今年も『Politics and Pitfalls of Japan Ethnography: Reflexivity, Responsibility, and Anthropological Ethics（日本の民族誌における政略と落とし穴：内省、責任、人類学的倫理感）』（Oxford: Routledge）（編集者）を含め、多数の出版を行いました。また、6月のイスラエルアジア学会での「Gendering Robots: Posthuman Sexism in Japan（ロボットのジェンダー化：日本におけるポストヒューマン・セクシズム）」と題したキーノート・レクチャーなど、4つの招待講演を行いました。ロバートソン教授は今秋から2年間、アメリカ人類学会の東アジア人類学会の会長を務めます。

佐藤哲也（レジデンシャル・カレッジ）は、2009年7月12～17日にオーストラリアのメルボルンで開催された国際語用論学会の第11回会議において「Style-Shift and Public/Private Distinction in Online Personal Ads in Japanese（日本語のオンライン個人広告における文体の移行と公私の区別）」と題した論文を発表しました。この出張はCJSによって一部資金援助されました。

CJS教員・卒業生・フレンドによる新著

『***The Four Great Temples: Buddhist Archaeology, Architecture, and Icons of Seventh-Century Japan***（四大寺：7世紀日本の仏教考古学、建築、偶像）』（University of Hawai'i Press、2009年）



日本史のなかでも7世紀ほど魅惑的な時代はそれほどありません。7世紀は、仏教がこの国において最初に栄えた時代であり、飛鳥寺、百済大寺、川原寺、薬師寺(古文書において称されるところの「四大寺」）が建立された時期でした。これら4つの建造物は、その偉大なる歴史的重要性にもかかわらず、現在では廃墟と化していることが主因となり、西洋の文献においてはほとんど注目を引いていません。焦点は、見事に維持保存されている寺院ではあるもののその当時の主流寺院ではなかった法隆寺に移っています。ドナルド・マッカラム（2000年冬期TVP）は、この著作において、日本の仏教および仏教建築の歴史における四大寺の正しい位置付けを復活させることを追求しています。

マッカラムは、四大寺の各々の詳細にわたる分析において、史料編纂上の問題、立地、レイアウト、基礎、瓦、遺物、偶像を考察し、読者が進化を年代順にたどることを可能にしています。主な特徴の一つは、今までもっともらしい解決を拒絶してきた数多の歴史的問題を明確化するための考古学データと文書記録データの混交です。本著は、寺院に焦点を当てているものの、研究の背景を成す政治上および宗教上の展開にも目を向けています。さらに、中国

や朝鮮の雄大な国家寺院に関するデータの統合にも努め、そうすることにより、往々にして単一国家に関してのみ説明されてきた課題に対して異文化的洞察を注いでいます。

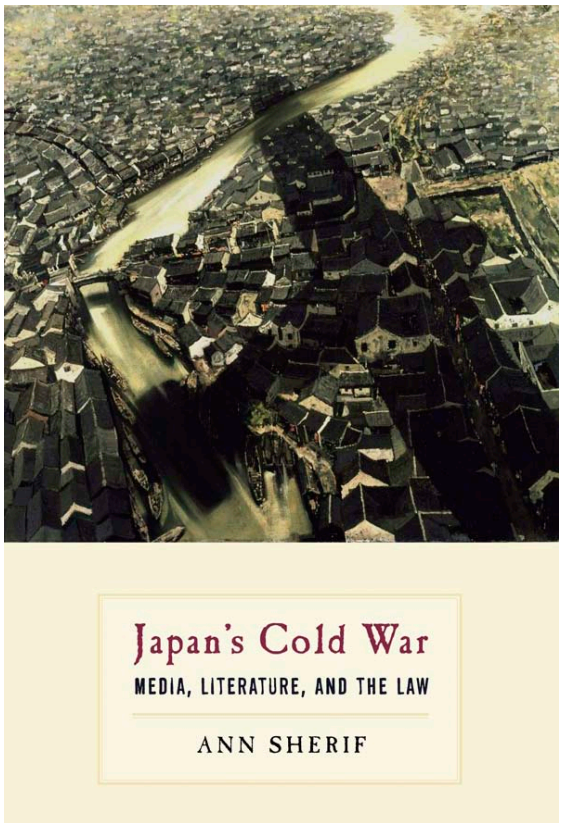
『***Japan's Cold War: Media, Literature, and the Law***（日本の冷戦：メディア、文学、そして法律）』（Columbia University Press、2009年）

CJS卒業生のアン・シェリフは、最近、『Japan's Cold War: Media, Literature, and the Law（日本の冷戦：メディア、文学、そして法律）』（Columbia University Press、2009年）を出版しました。「この本の執筆における一つの目的は、米国に服従した時代、または占領とエキサイティングな1960年代の間のさえない時代として通常みなされている1950年代の日本文化の様相をより完全に展開することにありました」とシェリフは述べています。彼女はオベリン大学で東アジア研究プログラムの教鞭をとっています。実際のところ、この移行期は、きわめて活気に溢れ、創造性と政治上の選択の両方において冷戦の緊張に捕らえられた芸術家や知識人にとって挑発的な10年でした。

本著において、シェリフは、冷戦の「不思議な緊張」のなかで進化した生活経験と文化的生産の意義を理解するために、冷戦研究を高度な政治の範囲を超えて国際外交劇から高遠な核戦略の分野に至るまで拡張した学者や理論家の洞察に基づいた構築を行っています。冷戦は、「感情と精神」を勝ち獲ろうとした超大国間の文化およびイデオロギーの対戦でした。

各章は、日本の文化的冷戦政治との係りのハイライトとなったきわめて重要な瞬間、圧巻的出来事、または重大な論議に焦点を当てています。映画監督の黒澤明、原爆作家といわれた原民喜、小説家にして映画スターであり後に政治家となった石原慎太郎、そして『ゴジラ』や『チャタレイ夫人の恋人』の和訳に至るまで、すべてが敗戦、帝国の滅亡、連合軍占領の後の移行期において日本が新しい文化圏を作り上げるうえで役に立った論争や風潮を露呈しています。

日本の文化圏内において、冷戦下の不安定な世界秩序とそのために二極化した世界観によって強化された対立は、時おり、それが外国当局によるものか国内当局によるものかに関わらず抗議、反対、言論の自由の範囲を狭めたり広げたりした企てに対して一般市民が四つに組んだ際に、政治活動や裁判所といった公の場において出現しました。そうした公的な過程が、新しく民主化された日本のイデオロギー上および文化上の基盤に寄与しました。「フリーワールド」の価値観の卓越性は、大衆文化とハイカルチャーにおいて明確に表現された反抗的な若者、家庭生活、遵奉、男らしさなどの欧米圏において唱導される文化的な価値観とアイデンティティーに魅了された状態を生みました。マルクス・レーニン主義的世界観の代替としての（または時には補完としての）米国の社会科学が価値観や文化に関する公の討論における有力ツールとして台頭しました。それと同時に、多数の芸術家が、科学者、ジャーナリスト、そして普通の一般市民と並んで、自分自身の作品の中で冷戦に対応しました。したがって、日本の作家、画家、評論家たちは、自分たちが冷戦のディスクールに深く関与しているものとみなしていたのです。



著者は次のように述べています。「私は、日本の文化が新しく進化しつつある世界秩序にどの程度関連していたかを強調しようと試みました。さらに、米国とはまったく異なる時代における米国の戦争および占領での経験を探索することは、一アメリカ人として実に妙味あることでした。」

2009〜2010年度教員研究助成金発表

日本研究センターの2009〜2010年度教員向け研究助成金の受賞者が決定しました。この助成金は、日本の様々な側面を調査する個人あるいは団体のプロジェクトに対して授与されます。本年度の受賞者およびプロジェクト内容は以下のとおりです。

ポール・ダンラップ（生態学・進化生物学部教授）には、本人の研究プロジェクト「Mariculture and Symbiosis of Hikari-ishimochi（ヒカリイシモチの養殖および共生）」への助成金が授与されました。ヒカリイシモチ（Siphamia versicolor）は、沖縄、九州、四国のサンゴ礁域に生息する海洋発光魚です。ヒカリイシモチは、他の多くのサンゴ礁魚類と同様、過剰捕獲および人間の活動による生息場のサンゴ礁の破壊が原因となって急減の一途にあり、存続が脅かされています。琉球大学の中村將教授とのコラボレーションであるこの研究は、ヒカリイシモチが一生のなかで共生発光細菌を得る成長段階に焦点を当てます。光がヒカリイシモチが食べる小魚や甲殻類を惹きつけ、より大きな捕食性深海魚に発見されて食べられることの回避を助けることから、発光共生はヒカリイシモチ存続の中枢のカギとなっています。この研究で取得される情報は、長期的なヒカリイシモチ養殖に基盤を提供することになります。この助成金は、ダンラップ教授の沖縄での研究および出版に役立てられます。

福岡真紀（アジア言語文化学部助教授）には、「Between Seeing and Knowing: The Concept of Real in Japan, 1830–1872（見ることと知ることの狭間で：1830〜1872年の「リアル」という概念）」の草稿の提出を促進するための資金が授与されました。この原稿執筆プロジェクトは、写真表現が実を結ぶ社会文化的前後関係を解明するために視覚文化、知識人史、写真史の各要素を統合することを目指したものです。さらに、「写真」という概念に付随する意味の再発見を通じて日本の初期の写真史と視覚文化を書き直すことも追求します。

ケネス・盛・マッケルウェイン（政治学部助教授）には、本人のプロジェクト「The Democratization of Japanese Party Politics（日本の政党政治の民主化）」への助成金が授与されました。この研究は、政党内の民主制レベルとそれが政府の人気度および選挙の結果に与える影響力における国家間の相違を分析します。政府の意思決定における政党、特に自由民主党の中心的役割を鑑みるに、政党の構造に関するより優れた情報は、政治行動に対する私たちの理解を高めることになります。この資金援助はデータ収集に充当されます。

レスリー・ピンカス（歴史学部准教授）には、1930年代から現代までの日本における地域運動やイニシアティブの系譜をたどる本人の著作プロジェクト『Movements on the Margins of Japan's Recent Past（日本の近過去における社会の周辺部の運動）』への資金が授与されました。このプロジェクトは、4つの目立った運動、すなわち、第二次世界大戦直前の京都における人民戦線文化運動、敗戦後の広島県における草の根の民主化イニシアティブ、同じく広島県における1979年の人権運動、そして日本の北方の奥地においてミレニアムをつなぐ「子どもコロニー」を取り上げます。ピンカス教授は、助成金の支援により、広島、関西、北海道でのフォローアップ調査、東京での図書館およびアーカイブの研究、アン・アーバーでの執筆を完成させます。

ジョナサン・ズウィッカー（アジア言語文化学部准教授）には、本人のプロジェクト「The Moving Image in an Age of Print: Ephemera, Scrapbooks, and the Archive of Early Japanese Cinema（印刷時代における動画：初期日本映画のエフェメラ、スクラップブック、アーカイブ）」への助成金が授与されました。日本映画史初期の中心には、最も初期の映画について私たちが知っていることは、今やもはや現存していない映画フィルムのプリントに基づいたものではなく、制作、配給、展示、センサーシップの過程において生じたエフェメラ、ボードシート、広告、レビューなどの一連の印刷物に基づいているという、パラドックスが存在します。今回の調査は、20世紀初頭に収集された印刷物エフェメラをまとめた一組のスクラップブックを中心に行われます。この資金援助は、このスクラップブックとその関連資料を調査するための東京および群馬への出張を支えます。

学

教員・学生へのサポート

アジア図書館旅費補助金

2009年7月1日から2010年6月30日までの間にミシガン大学アジア図書館所蔵資料の活用を希望する日本研究者を対象に、旅費、宿泊費、食費、コピー料金を軽減する目的の補助金として、最高700ドルが提供されます。アジア図書館は、ゴードン・W・プランゲ文庫のマイクロフィルム、また北米唯一の『東亜同文書院大旅行誌』と『東亜同文書院中国調査旅行報告書』のマイクロフィルムを所有しています。図書館に関する詳細情報につきましては、http://www.lib.umich.edu/asiaをご覧ください。または図書館アシスタント (734) 764-0406 までご連絡ください。関心ある研究者の方は、①申請書、②研究内容および所蔵資料の利用の必要性に関する簡略説明書 (250語以内)、③利用を希望する資料のリスト (申請前に図書館のオンライン目録で該当資料が利用可能とされていることを確認してください)、④最新の履歴書、⑤予算、⑥旅程案を、当センター宛に提出してください。当センターでは、メール (umcjs@umich.edu) での申請を2010年5月31日まで受け付けています。

2009年度アジア図書館旅費補助金受領者

楡井洋介博士は、日本史を専門とするインディアナ大学サウスベンド校歴史学部助教授です。最近の研究は、明治時代の代表的キリスト教徒、具体的には彼らと19世紀後半以降の日本の帝国主義の展開との関係に焦点を当てています。この旅費補助金を利用してのアジア図書館訪問の主要目的は、図書館で利用できるキリスト教に関する資料を再検討して著作『The Ethics of Empire: Christianity, Moral Culture and Imperialism in Meiji Japan (帝国の倫理観：明治日本のキリスト教、道徳文化、帝国主義)』の原稿を完成させることにありました。この著作は、カリフォルニア大学バークレー校歴史学部での博士論文から発展したもので、執筆済みの章の一部が最近、『Japanese Journal of Religious Studies』誌に公表されました。

インディアナ大学サウスベンド校コミュニケーションアート学部助教授である**小畑由里博士**は、「Meanings of Sexual Expression and Problems of Free Speech: Comparative Cultural Studies of Law on Free Speech Rights in Japan and the United States (フリースピーチの性的表現と問題の意味：日米における言論の自由に関する法律の比較文化的研究)」と題した博士論文によりコロラド大学ボールダー校からメディア研究学で博士号を取得しました。小畑教授は、コーネル大学ロースクールでの博士研究員フェローシップの最中も、日本の最高裁判所による猥褻裁判判決の文化的および歴史的側面に関する研究を継続し、現在はそれに基づいた著作の原稿を準備しています。この旅費補助金は、小畑教授がミシガン大学音楽学部の大学院生時代に何時間も過ごしたうえパートタイムで働いたこともあるアジア図書館において、19世紀後半以降の日本の社会政治史および文化史に関する資料を研究するために利用しました。

2009〜2010年度学生奨学金

メロン夏期奨学金
- **趙秀美** (人類学博士課程)
- **ダニエル・M・ココラン** (人類学博士課程)
- **メガン・E・ヒル** (音楽学博士課程)
- **猿谷弘江** (社会学博士課程)
- **ケンドラ・D・ストランド** (ALC博士課程)
- **コリーン・M・タイセン** (情報学修士課程)
- **嚴昭貞 (オム・ソジョン)** (歴史学博士課程)

インターナショナル・インスティテュート外国語奨学金
- **アーロン・P・プロフィット** (ALC博士課程)
- **ジョシュア・E・シュラケット** (CJS修士課程)

CJS基金奨学金
- **エミリー・F・カノーサ** (CJS修士課程)
- **ブライアン・C・ダウドル** (ALC博士課程)
- **ジョシュア・A・イリザリ** (人類学博士課程)
- **ジェニファー・L・ライト** (CJS修士課程)

ミシガン大学同窓会日本支部奨学金
- **キム・ジウン** (人類学博士課程)
- **ガブリエル・コッフ** (人類学博士課程)
- **梅田道生** (政治学博士課程)

ブリーフィング奨学金
- **横山泉** (経済学博士過程)

ラッカム・ブロック奨学金
- **アダム・レッドフォード** (CJS修士課程)
- **鈴木真理** (CJS修士課程)
- **ジョー・D・トルズマ** (CJS修士課程)

メロン奨学金
- **ケヴィン・C・ガウジ** (歴史学博士課程)
- **ケヴィン・P・マルホランド** (ALC博士課程)

2009〜2010年度外部奨学金

モーリー・C・デジャルダン
(ALC博士課程；国際交流基金博士論文執筆者奨学金)

ブライアン・C・ダウドル
(ALC博士課程； ラッカム国際研究奨学金)

シェリー・J・ファンチェス
(歴史学博士課程；ブレークモア・フリーマン奨学金)

王思潔
(CJS修士課程；伊藤国際教育交流財団奨学金)

トーマス・W・バークマン（CJS修士号1971年卒）は、ニューヨーク州立大学バッファロー校のアジア学の研究教授ですが、ノートルダム大学のジョーン・B・クロック国際平和研究所での2009年度秋学期レジデンシー・フェローシップを受けました。

1986年に創設されたクロック研究所は、世界中の紛争の根底に存在する緊張の解決法を追求します。同研究所は、暴力と紛争の解決の研究に取り組む主要センターの一つです。フェローは、同研究所の常勤教員および研究スタッフと協働すると同時に、特定の国際紛争に関する本人の研究も行います。バークマン博士は、執拗に続く敵対心が戦争と植民地主義の過酷な経験に部分的に根ざしている日本、中国、韓国の間の和解に関する本人のプロジェクトを追求します。

ウィリアム・バートン（歴史学博士課程）は、横浜のアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの夏期プログラムに参加しました。

モーリー・C・デジャルダン（ALC博士課程）は、今年は国際交流基金の博士論文執筆者奨学金による資金援助を得て、日本国内で「Editing Identity: Literary Anthologies and the Author in Late Meiji Japan（アイデンティティーの編集：明治後期の日本の文学選集と著作者）」と題する博士論文に関する調査を実施しています。

ブライアン・ダウドル（ALC博士課程）は、国際交流基金の博士論文執筆者奨学金により、日本大学において博士論文のための調査を実施中です。彼の博士論文の表題は「Reprinting History: The Period Novel, the roman historique, and the Historical Consciousness in Meiji Japan（歴史を再版して：明治時代の時代小説、歴史小説、および歴史意識）」です。この調査の資金は、2009年度ラッカム国際研究奨学金から部分的に調達されています。

シェリー・ファンチェス（歴史学博士課程）は、ブレークモア・フリーマン財団のフェローシップの資金援助を得て、横浜のアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの10ヶ月間の学年度プログラムに参加中です。

アニー・ホガート（CJS修士号1995年卒）の博士論文『Curriculum & Instructional Reform in Japan: A Case of Continuous Improvement（日本におけるカリキュラムと指導の改革：継続改善の一例）』が2009年春にドイツのザールブリュッケンを拠点とする出版社VDMから出版されました。彼女はさらに、ミシガン州エイドリアンのシエナハイツ大学の教員養成修士課程の准教授に昇進しました。

鎌田伊佐生（経済学博士号2008年卒）は、2009年秋にウィスコンシン大学マディソン校のロバート・M・ラフォレット行政大学院助教授に就任します。

ソニア・メフト（CJS修士号2009年卒）は、アジア言語文化学部が提供する日本語教授法を履修し、学業を修了した後、2009年8月に卒業しました。夏季の間は、トルコのアンカラにある土日基金文化センターでインターンシップにつき、トルコの「2010 Year of Japan（2010年トルコにおける日本年）」の計画を担当する委員会の手助けをしました。

アーロン・P・プロフィット（仏教学博士課程）は、1年間の日本滞在中です。横浜のアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの夏期プログラムに参加し、その直後に同センターの10ヶ月間のプログラムを開始しました。今年の勉学は、CJS、ミシガン大学インターナショナル・インスティテュート、アジア言語文化学部からフェローシップを授与されて可能となりました。

2009年春には、カリフォルニア大学バークレー校で開催された北米仏教学研究大学院生会議において「Kōen the Dragon Bodhisattva（大蛇菩薩、皇円）」と題した論文のプレゼンテーションを行いました。また、論文「Buddhism: The Concept of the Pure Land Reconsidered（仏教：浄土の概念の再考）」がコロラド大学ボールダー校宗教学部の大学院生機関誌である『Next: Emerging Voices in Religious Studies Scholarship（ネクスト：宗教学研究者の中から出現する声）』の中で発表されました。

齊藤弘久（社会学博士課程）は、今年8月にハワイ大学マノア校社会学部の助教授に就任しました。

リンダ・タカミネ（人類学博士課程）は、今年の夏、京都アメリカ大学コンソーシアムの日本語上級プログラムに出席しました。

ジョゼフ・トルズマ（CJS修士課程）は、今年の夏、名古屋市の株式会社森精機製作所でのインターンシップに参加しました。

リア・ゾラー（CJS修士号2009年卒）は、8月に、JETプログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業）のコーディネーターとして就職し、石川県鳳珠郡穴水町を担当しています。

CJS修士課程2009年4月卒業生

エリック・M・アガナ
レイチェル・M・デュプレシス
ジョナサン・L・ホップ
ニッキ・A・ナバズニ
キャサリン・E・パウェルスキー
クリストファー・J・シャド
リア・ゾラー

博士課程2009年4月卒業生

ダイロン・K・ダブニー

新入生

日本研究センターは、2009年秋期にミシガン大学に入学した以下の学生（括弧内は出身大学）を歓迎します。

CJS修士課程

エミリー・F・カノーサ（ミシガン大学）
ジェニファー・M・フック
（ニューヨーク州立大学アルバニー校）
季方圓（大連外国語学院）
アダム・レッドフォード（ベレア大学）
アンドリュー・マスカロ（ミシガン大学）
ジョシュア・J・ローネバウム
（コーネル大学）
ジョシュア・E・シュラケット
（コーネル大学）

その他の大学院プログラム

ケヴィン・C・ガウジ
（オレゴン大学、歴史学）
ケヴィン・P・マルホランド
シカゴ大学、アジア言語文化）

お知らせ

2009〜2010年度 トヨタ招聘客員教授

CJS第34期トヨタ招聘客員教授は、ジュリア・アデニー・トーマスです。9月11日の歓迎レセプションでキャンパスに迎えられます。トーマス教授は、ノートルダム大学歴史学部の准教授で、その研究は、近代日本、自然、そして知識人史と政治史における環境、美術館、回想、および写真に焦点を当てています。アン・アーバー滞在期間中、トーマス教授は『Between Reality and Sex: Japanese Photography in War, Occupation, and After（現実と性の間：戦争、占領、その後の日本の写真）』(Harvard University Pressと出版契約済み）のための調査を継続します。最も最近の出版物は、『Reconfiguring Modernity: Concepts of Nature in Japanese Political Ideology（近代の再構築―日本政治イデオロギーにおける自然の概念）』の和訳の『近代の再構築』（法政大学出版局、2008年）です。原書『Reconfiguring Modernity: Concepts of Nature in Japanese Political Ideology』(Berkeley and Los Angeles: University of California Press、2002年）は、2003年にアメリカ歴史学会のジョン・K・フェアバンク賞を受賞しています。トーマス教授はシカゴ大学から歴史学で博士号を取得しました。この秋は、トヨタ招聘客員教授任命の一環として「Seeing History: Photography as Evidence and Interpretation（歴史を観る：証拠と解釈としての写真）」を教えます。さらに、2010年2月18日には「A War without Pictures: Wartime Japan's Reluctance to Use Photography（写真のない戦争：戦中日本の写真使用への抵抗）」と題したヌーン・レクチャーを行います。

CJSのK-12アウトリーチ

冬は、降雪や低温にもかかわらず、CJSのアウトリーチにとっては多忙な時期です。バレンタインデーは、CJSと中国研究センターおよびコリア研究センターのコラボレーションである教師を対象とする汎東アジア・ワークショップの第1回を開催した記念すべき日となりました。このワークショップは、ミシガン州の歴史と地理の教育に関する州としての新しい枠組みに補完するように設計され、新年の習慣および慣行の地域比較的観察を提供しました。ウィリアム・マルム名誉教授の元学生が作曲した「KoNami」が太鼓、尺八、鐘を教師たちに紹介し、ワークショップの主なインタラクティブ要素の役割を果たしました。CJSの髙田あづみと水野啓もプレゼンターを務めました。3月には、ハートランド高校の世界言語週間（World Languages Week）のために2件のプレゼンテーションがコーディネートされました。民族音楽学の大学院生であるメガン・ヒルがハートランドの高校生に琴を紹介し、中島郷子が日本語での自己紹介の仕方を高校生に教えました。冬期の締めくくりとしては、CJSは、戦後の日本社会に関する授業において日本映画を使用することに焦点を当てたワークショップを率いました。レスリー・ピンカス（ミシガン大学歴史学部准教授）によるプレゼンテーション、地元の日本語教師によって準備されたレッスン、ミシガン大学教育学部のローレン・マッカーサー‐ハリスによるインタラクティブ・プレゼンテーションを特徴としたこのワークショップは、戦後日本史研究を世界史のクラスに統合する方法の紹介を追求しました。

そして春には、インターナショナル・インスティテュートの写真コンテストに時期を一致させ、CJS最初の写真コンテストを開催しました。写真は、CJSのウェブサイトのフォトギャラリーにポスティングされ、K-12（小学校入学から高校卒業までの12学年）の　教師が使用できるようにマッティングされます。そのなかの1枚のラッキーな写真は、CJSを代表して、インターナショナル・インスティテュートの K-12 アウトリーチ・カレンダーに使用されます。今年の応募期日はもう過ぎましたが、日本で就学または研究の経験のある学生は来年のコンテストにぜひ参加してください。

最後に、今年新しく始めたことは、CJSの学生大使プログラム（Student Ambassador Program）です。プレゼンターを務めることによるK-12生徒へのアウトリーチに関心のある学生、日本、日本語、日本文化の学習経験がある学生、または日本に行ったことがある学生の皆さんは、詳細情報について、ヘザー・C・リトルフィールド（jclittle@umich.edu）まで連絡してください。

日本語テーブル

レジデンシャル・カレッジ（RC）の日本語集中講座は、日本語テーブルで会話パートナーを務めるボランティアを募集しています。毎年秋期には約15名の学生がRCで日本語の学習を開始しますが、日本語テーブルでの日本語を話す人との打ち解けた会話の練習は、彼らの語学のスキルと文化の認識に必要不可欠な役割を果たしています。詳細情報につきましては、佐藤哲也（satoot@umich.edu）までご連絡ください。またはウェブサイト（http://sitemaker.umich.edu/rcjapanese）をご覧ください。よろしくお願いします。

日本語教授法プログラム

ミシガン大学の日本語教授法プログラムの5周年記念を祝福するパーティーが6月下旬に開かれました。今年のコースの履修者ならびに過去4年間の卒業生が集ま

第15ページに続く

2009年秋季および2010年冬季前半

9月

11日 歓迎レセプション：ジュリア・アデニー・トーマスCJS2009～2010年度トヨタ招聘客員教授（ノートルダム大学歴史学部准教授）の歓迎レセプション。午後4～6時、社会福祉学部ビル（School of Social Work Building）インターナショナル・インスティテュート・ギャラリー。

17日 ヌーン・レクチャー*：「Allusion and Authority: The Love-Song of Lord Takafusa and Its Illustrated Self（引喩と王権 ～『隆房卿艶詞絵巻』～）」ジョシュア・モストウ（ブリティッシュコロンビア大学アジア研究教授）（アジア学会との協賛）。

24日 ヌーン・レクチャー*：「Rediscovering and Recreating Gendered Words in Japanese（日本語ジェンダー表現再考）」佐々木瑞枝（武蔵野大学大学院言語文化専攻科教授）（ウェスタンミシガン大学の外国語学部日本語プログラム、曽我ジャパンセンター、ジェンダーと女性学プログラムとの協賛）。

25日 CJS無料映画上映**：『酔いどれ天使』黒澤明監督（1948年、98分、35ミリ、英語字幕付日本語）。

10月

1日 ヌーン・レクチャー*：「A Peripheral Vision: 'International Contemporaneity' in Japanese Art Discourse: Circa 1970（周辺的ビジョン：日本の芸術のディスクールにおける「国際的同時代性」）」富井玲子（学者）。

2日 CJS無料映画上映**：『晩春』小津安二郎監督（1949年、108分、35ミリ、英語字幕付日本語）。

9日 CJS無料映画上映**：『野良犬』黒澤明監督（1949年、122分、35ミリ、英語字幕付日本語）。

15日 ヌーン・レクチャー*：「Dirty Sexy Haiku: Senryu, Bareku, and the Perversification of Haikai（超きわどい俳句 ― 川柳と破礼句とアダルト版俳諧）」アダム・カーン（ウィスコンシン大学マディソン校日本文学准教授）。

16日 CJS無料映画上映**：『彼岸花』小津安二郎監督（1958年、118分、35ミリ、英語字幕付日本語）。

22日 ヌーン・レクチャー*：「Image and Imagination in Meiji Photographs（明治の写真における画像と想像力）」アレン・ホックリー（ダートマス大学美術史学部准教授）。

23日 CJS無料映画上映**：『野火』市川昆監督（1959年、110分、35ミリ、英語字幕付日本語）。

29日 ヌーン・レクチャー*：「Who Belongs Where? The Allies and the Ethnic Sorting of East Asia, 1945-46（だれがどこへ？連合軍と民族分離、1945-46）」ローリー・ワット（ワシントン大学（セントルイス）歴史学・国際・地域研究助教授）。

30日 CJS無料映画上映**：『肉体の門』鈴木清順監督（1964年、90分、DVD、英語字幕付日本語）。

11月

5日 ヌーン・レクチャー*：「Benjamin Smith Lyman and Rendaku（ベンジャミン・スミス・ライマンと連濁）」ティモシー・ヴァンス（アリゾナ大学東アジア研究教授）。

6日 CJS無料映画上映**：『東京流れ者』鈴木清順監督（1966年、83分、DVD、英語字幕付日本語）。

12日 ヌーン・レクチャー*：「Death and Buddhism in the Middle Ages: From the Standpoint of the Model of 'Official Monks' and 'Reclusive Monks'（中世における死と仏教：官僧・遁世僧体制モデルの立場から）」松尾剛次（山形大学人文学部教授）。

19日 ヌーン・レクチャー*：「Taming the Formosan Savage: The Japanese Colonial Postcard as Photograph, Object, and Image（植民地の絵葉書に現れた台湾『蕃人』を慰撫する使命）」ポール・バークレー（ラフィエット大学歴史学部准教授）。

12月

3日 ヌーン・レクチャー*：「Sitting Pretty: Portrait Photography and Gender in Meiji Japan（きれいに姿勢：明治時代の肖像写真とジェンダー）」カレン・フレーザー（サンタクララ大学美術史学部講師）。

1月

9日 CJS第6回年次お餅つき：伝統のお餅つき、試食、音楽、書道、折り紙、ゲーム、その他。午後1～4時、場所未定。

14日 ヌーン・レクチャー*：「Lost in Transition: Young Workers in Japan's Changed Employment Landscape（ロスト・イン・トランジション：日本の変化した雇用 Landscape における若年労働者）」メアリー・ブリントン（ハーバード大学社会学部・ライシャワー日本研究所社会学教授）（国際交流基金日米センターとの協賛）。

21日 ヌーン・レクチャー*：「Inquilism and Domestic Enslavement on a Coral Reef: The Curious Biology of the Cardinalfish Hikari-ishimochi（サンゴ礁で起こる不均衡な共生と飼育的隷属：珍しいイシモチ、ヒカリイシモチの生物学）」ポール・ダンラップ（ミシガン大学生態学・進化生物学部教授）。

28日 ヌーン・レクチャー*：「Suicide and the Social Self: Youth, Government, and Popular Culture Responses to Internet Group Suicide in Japan（自殺と社会的自己：ネット集団自殺に対する若者、政府、大衆文化の反応）」オザワデシルバ・チカコ（エモリー大学人類学助教授）。

*ヌーン・レクチャーはすべて無料で一般に公開され、別途通知のない限り、正午から午後1時まで社会福祉学部ビル1636号室にて行われます。ヌーン・レクチャーは米国教育省から「タイトルIV」助成金を受けています。最新情報につきましてはCJSのウェブサイト、http://www.ii.umich.edu/cjs/eventsprograms/noonをご覧ください。

**映画上映はすべて、ローチ・ホール（611 Tappan Street, Ann Arbor）のアスクウィズ・オーディトリアムにて午後7時に開始されます。映画シリーズは、米国教育省から「タイトルIV」助成金を受けています。最新情報につきましてはCJSのウェブサイト、http://www.ii.umich.edu/cjs/eventsprograms/filmをご覧ください。

総編集長より

第1ページより続く

ン・クレイトン・キャンベルは、1977年に『Contemporary Japanese Budget Politics（予算どんぶり－日本型予算政治の研究）』をカリフォルニア大学出版局から、さらに1992年には『How Policies Change: The Japanese Government and the Aging Society（日本政府と高齢化社会－政策転換の理論と検証）』をプリンストン大学出版局から出版しました。しばらく絶版となっていました両著作ですが、私たちは最近、当出版会の電子出版物「クラシックス・オンライン」に加えることができました。皆さんの多くがご存知のとおり、キャンベル教授は日本研究センターおよび同出版会の元所長であり、現在はミシガン大学の政治学名誉教授であるうえ、東京大学ジェロントロジー寄付研究部門の客員教授でもあります。キャンベル教授の両著作を再び入手可能とすることができたことを、私たちは非常に嬉しく思っています。ぜひとも当出版会のウェブサイトを訪れて「Electronic Publications」をクリックしてください。

日本研究センター出版会総編集長
ブルース・ウィロビー

お知らせ

第13ページより続く

り、互いに消息の更新や日本語教育の情報交換を楽しみました。

日本語教授法プログラムは、外国語としての日本語を教えることを希望する人々を訓練するために、ミシガン大学の夏期語学校の一環として2005年に開始されました。言葉が話せればその言葉を教えられるわけではありません。日本語を日本人以外の話し手に教えるためには、知識と技能の取得が必要です。このプログラムは、コースのインストラクターである岡まゆみ（ミシガン大学日本語プログラムディレクター）が、日本語教師としての本人の経験を日本語を教えたいもののやり方が分からない人たちと共有するために開発しました。参加者は、米国人の博士課程の学生から米国人、韓国人、中国人の学士課程の学生、さらには地域コミュニティの日本人まで、実に多種多様です。

クラスでは、学生たちは共同作業で日本語の筆記、文法、語彙、発音、そして日本文化を学びます。また、クラスは、言語取得の基礎、教科書の分析、コンピュータを活用した語学学習（CALL）を提供し、さらに学生が模擬レッスンのプレゼンテーションと研究プロジェクトを実施する機会も与えます。

日本語教授法プログラムは、設立以来、大々的な成功を収め、この地域に優秀な日本語インストラクターを数多く送り出しています。そればかりでなく、ミシガン大学、イースタンミシガン大学、および多数の公立高校ならびに私立高校による日本語教師募集にもつながっています。さらには、このプログラムは、ミシガン大学アジア言語文化学部の博士課程の学生が文化と語学の両方のクラスを教授できるデュアルトラックの就職口を確保することにも役立っています。日本語教授法プログラムに関する詳細情報につきましては、岡まゆみ（mayoka@umich.edu）までご連絡ください。

DENSHO
伝書

ミシガン大学日本研究センター
Center for Japanese Studies
University of Michigan
1080 S. University, Suite 4640
Ann Arbor, MI 48109-1106
電話：734.764.6307
ファクシミリ：734.936.2948
Eメール：umcjs@umich.edu
ウェブサイト：http://www.ii.umich.edu/cjs/

所長：ケン・K・イトウ
アドミニストレーター：深澤ゆり
プログラム・アソシエート：ジェーン・オザニッチ
アウトリーチ・コーディネーター：
ヘザー・リトルフィールド
学務コーディネーター：髙田あづみ
オフィス・アシスタント：サンドラ・モラスキー

ミシガン大学日本研究センター出版会
Center for Japanese Studies Publications Program
University of Michigan
1007 East Huron
Ann Arbor, MI 48104-1690
電話：734.647.8885
ファクシミリ：734.647.8886
Eメール：cjspubs@umich.edu
ウェブサイト： http://www.umich.edu/~iinet/cjs/publications

出版会ディレクター：殿村ひとみ
総編集長：ブルース・ウィロビー
CJS執行委員会：
ケネス・盛・マッケルウェイン、
ケン・K・イトウ（職権上）、岡まゆみ、
仁木賢司（職権上）、ジェニファー・ロバートソン、
殿村ひとみ、吉浜美恵子

ミシガン大学理事：
ジュリア・ドノバン・ダーロウ、ローレンス・B・ディーチ、
デニース・イリッチ、オリビア・P・メイナード、
アンドレア・フィッシャー・ニューマン、アンドリュー・
C・リックナー、S・マーティン・テイラー、キャサリン・
E・ホワイト、メアリー・スー・コールマン（職権上）

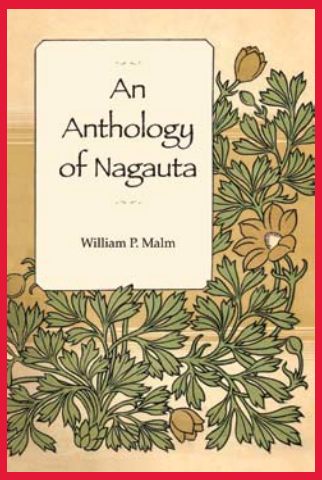
伝書編集人：ジェーン・オザニッチ
伝書デザイン：ワグナー・デザイン・アソシエーツ
伝書翻訳：村上まどか
伝書制作：プリンテック

学

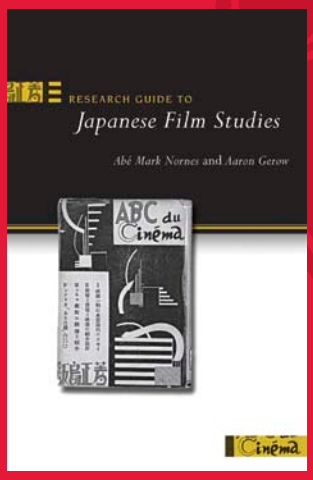
ミシガン大学
日本研究センター

2009年秋

日本研究センター出版会新刊書



『An Anthology of Nagauta
（長唄歌詞選集）』
ウィリアム・P・マルム
(William P. Malm) 著



『Research Guide to Japanese Film Studies
（日本映画研究のための調査ガイド）』
阿部・マーク・ノーネス（Abé Mark Nornes）
アーロン・ジェロウ（Aaron Gerow）共著

DENSHO
伝書

ミシガン大学日本研究センター
Center for Japanese Studies
University of Michigan
1080 S. University, Suite 4640
Ann Arbor, MI 48109-1106